

事例番号 144 まちと里を結ぶ地域再生(大分県竹田市)

1. 背景

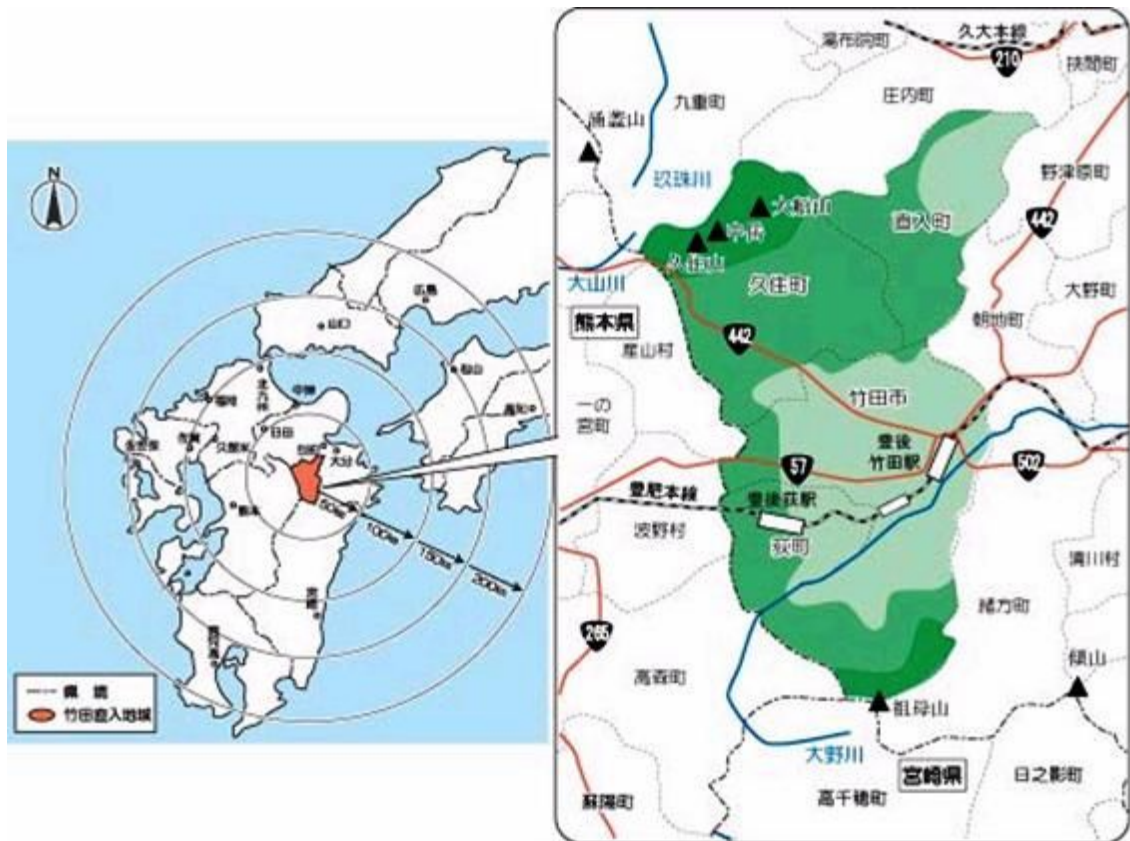
竹田市は大分県南西部に位置する人口約 2 万 7 千人の小さな城下町である。南は宮崎県に接し、西は熊本県に接している。市の北西にくじゅう連山、西に阿蘇の外輪山、南に高千穂の山々があり、市の土地は南西から北東へ緩やかに下っている。市の北西に豊後大野市、その先に大分市が位置し、さらにその先に別府湾が広がる。その別府湾に向かって流れる大野川の源流が竹田市にあり、その源流に 1 日数万トンの湧水量を誇る湧水群がある。竹田市は水と緑に恵まれた自然豊かなまちである。市の主な産品は、このような自然の中で作られる米、カボス、椎茸、トマト、スイートコーン、サフラン等である(椎茸とサフランは日本一の生産量)。豊後牛も生産されている。

竹田市は滝廉太郎の曲「荒城の月」のモデルといわれる岡城址で有名である。岡城は 1185(文治元)年、緒方三郎惟栄(これよし)が源義経を迎えるために築いたと伝えられるが、1369(応安 2)年以降は志賀氏の居城となった。秀吉の逆鱗に触れた大友氏の改易に伴って志賀氏は 1593(文禄 2)年に去り、翌 1594(文禄 3)年に中川氏が移封された。中川氏は近代的な城郭を築くとともに、民家を玉来地区等から移して城下町を建設した。以後、竹田は岡藩 7 万石の城下町として奥豊後の政治、経済、文化の中心となり、また、竹田直入地区の地域商業の拠点となって栄えてきたが、民家の多くは 1877(明治 10)年の西南の役で消失してしまった(城は 1874 年に取り壊し)。しかし江戸時代の町割りは残り、家並みも西南の役後に再建され、現在でも昔日の面影を武家屋敷通りなどに見ることができる。周囲の自然と調和した美しい町なみは竹田市の大切な歴史資産になっている。また、岡城跡をはじめとする史跡、文化財、武家屋敷なども竹田市の重要な財産である。文化人も田能村竹田、瀧廉太郎、佐藤義美などが輩出されている。

竹田のまちが市となったのは 1954(昭和 29)年 3 月の 9 町村合併による市制施行からであり、その後 1955(昭和 30)年 7 月の 1 村の地区の編入を経て 2005(平成 17)年 4 月 1 日には 3 町と合併して新しい竹田市になった。竹田市の中心市街地には、市全体の卸売・小売商業、飲食店の 4 割以上が集積しているほか、裁判所、検察庁、銀行、郵便局、図書館、歴史資料館、高校などの公共施設が集積している。公共交通機関は JR 豊肥本線のほか、竹田交通、大分バスが乗り入れている。

このような竹田市の中心市街地も、日本の都市の他の例にもれず、近年では衰退傾向を示すようになってきた。モータリゼーション、郊外における大型店の立地、都市基盤整備の遅れ、人口減少、高齢化等の要因によるものであるが、中心市街地の商店街は昭和 40 年代をピークに客足が落ち、最近では空洞化が進んでこれまで引き継がれてきた生活や文化も失われるおそれが出てきた。

そうした中で、竹田市は 1997(平成 9)年に「竹田市観光振興計画」を策定し、交流人口の拡大を図ることでまちを再生させる取り組みを始めた。城下町地区では、秋に里山(竹林)の環境保全と市街地の商業・観光の振興とを目的として「竹楽」というイベントを開き、春に竹籬事業の調査研究を行った。歴史的建造物の調査、景観形成事業の検証調査、アーティストによるワークショップ、まちと村を結ぶ交流策、田楽の再生実験、むらさき草による交流、スローライフ体験なども実施してきた。本稿では竹田市のこのような取り組みを紹介する。



竹田市の位置 (資料:市ホームページより)



中心市街地商店街

2. 目標

(1) 竹田市観光振興計画(1997年)

1997(平成 9)年、旧竹田市では農林業、商業、観光の三位一体となった活力と風格のある地域振興を図るため、「エコミュージアム構想(まるごと博物館)」をコンセプトに「竹田市観光振興計画」を策定した。この計画は以下のようなことを企図している。

- ・ 竹田市の歴史・文化・自然を基調に居住者が生活を愉しみ、外来者を迎え入れ、交流の輪を広げる。
- ・ その活力をもとに、農村環境の保全やむらの活力再生、さらにはその波及効果で城下町の商業の活性化を図る。
- ・ これらの過程において産業と文化の再生を市民が一体となって進める。

棚田等の農村景観が見直されるような価値観の変化、取り残されて手つかずの自然が残った田舎に自然や暮らしの体験を求めるグリーンツーリズムの動き、観光形態の変化等に対応する取り組みとなっている。

(2) 中心市街地活性化基本計画

竹田市都市計画区域用途区域のうち商業地域全域を含む JR 豊後竹田駅南側を対象とする「中心市街地活性化基本計画」(2004年策定)は、メインテーマを「歩いて楽しい“たけた”」としている。サブテーマは①出会い、賑わいのまちづくり、②歴史を活かしたまちづくり、③文化を体験するまちづくり、④癒し・潤いのあるまちづくり、⑤環境を意識したまちづくり、である。

(3) 竹田市街なみ環境整備計画

竹田市では 2000(平成 12)年から街なみ環境整備事業を実施してきているが、「竹田市街なみ環境整備計画」においては、「歴史的資源を活かした街なみ整備」を目標として、歴史ある「城下町」の伝統、歴史を重視しつつ居住環境の水準を高め、地域住民が誇りをもって暮らせる場づくりを進めることとしている。また、市民及び観光客を含む来街者に竹田の歴史を伝えることで「マチ行動」が活性化されることが期待されるが、それを支える「街なみづくり」を推進することとしている。

3. 取り組みの体制

1997(平成 9)年に策定された「竹田市観光振興計画」にもとづき、観光振興計画推進委員会(委員長:竹田市長)の付属機関として、1998(平成 10)年に「竹田研究所」が竹田市商工観光課内に設けられた。「竹田研究所」は「ツーリズム推進の実践部隊」であり、官民連携による地域おこし集団でもある。

「竹田研究所」は、地域の文化・観光資源などの掘り起こし、農林業・商工業の推進、情報発信等の多角的な活動を行っている。地域資源を活かした「竹田式ツーリズム」(子や孫をふるさとに迎えるもてなしと交流)の研究と実践は、「竹田研究所」が中心となって行われている。組織は、所長(竹田市助役)、研究員、アドバイザー、特派員、事務局の研究所スタッフ、5つの委員会で構成されている。

また、まちづくり会社である「第三セクター(株)むらさき草」が空き店舗を活用したチャレンジショップの運営等を行っている。一方、「竹田まちなみ会」(建築等の専門家の集団)が街なみ環境整備事業における家屋修復等に関して事業主等に対する助言等の支援活動を行っている。

「竹田研究所」の組織体制

所長(1名)	竹田市助役
研究員(19名)	市民研究員(9名)・職員研究員(10名)
アドバイザー(20名)	研究員OB・県職員【計画的に長く指導してもらう】
特派員(28名)	竹田研究所の事業等でお世話になった方々
事務局(4名)	専任職員(1名)・兼務職員(1名)・臨時職員(2名)

(資料:竹田研究所ホームページ)

「竹田研究所」の5つの委員会

研修	・ツーリズムの人材おこしの研修
情報発信	・メディア関係者に対する情報発信 ・観光情報だよりの発行 ・エリアマップの作成 ・イベントの経済効果調査 ・観光動態調査
城下町	・「歩いて楽しいまちづくり」をすすめるための街並み整備の検討や 活性化事業の推進 ・体験プログラムの開発
農村型	・グリーンツーリズムの推進 ・農泊・トレッキング・農村体験プログラムの開発 ・地域コミュニティ事業の取組
食・特産品	・「スローフード」の取組 ・城下町や農村の食文化の研究 ・特産品の開発

(資料:竹田研究所ホームページ)

4. 具体策

(1) エコミュージアム構想の策定

① 地域資源づくり

エコミュージアム構想は、城下町の歴史的な文化遺産や恵まれた農村の自然を活かし、市全体を観光の博物館として捉え、訪れる人々に市民の生活と環境を見て体験してもらうことを基本方針としている。「竹田研究所」が中心となりつつ、地域資源づくりに関してこれまで以下のアプローチを行ってきている。

① 伝統型(従来からの観光資源に磨きをかける)

〈事例〉 岡城址、城下町、入田湧水群

② 再発見型(観光資源としては充分にとりあげられていなかったもの)

〈事例〉 農業体験、地元の農産物加工品、石橋、円形分水、
白水ダムなどの農業・土木遺産

③ 歴史掘り起こし型(歴史に埋もれていたものを復活させたもの)

〈事例〉 紫草の復活、田楽料理

④ 新規創出型(地元の核となる施設を必要に応じて設ける)

〈事例〉 温泉館花水月、あ祖母(あそぼう)学舎、道の駅竹田、
交流センター緒環(おだまき)

② ツーリズム推進地区

ツーリズム推進地区として、1つの城下町地区と5つの農村地区の6地区が設定されている。地区名とそれぞれの目標、施設等は以下のようになっている。

【城下町地区】

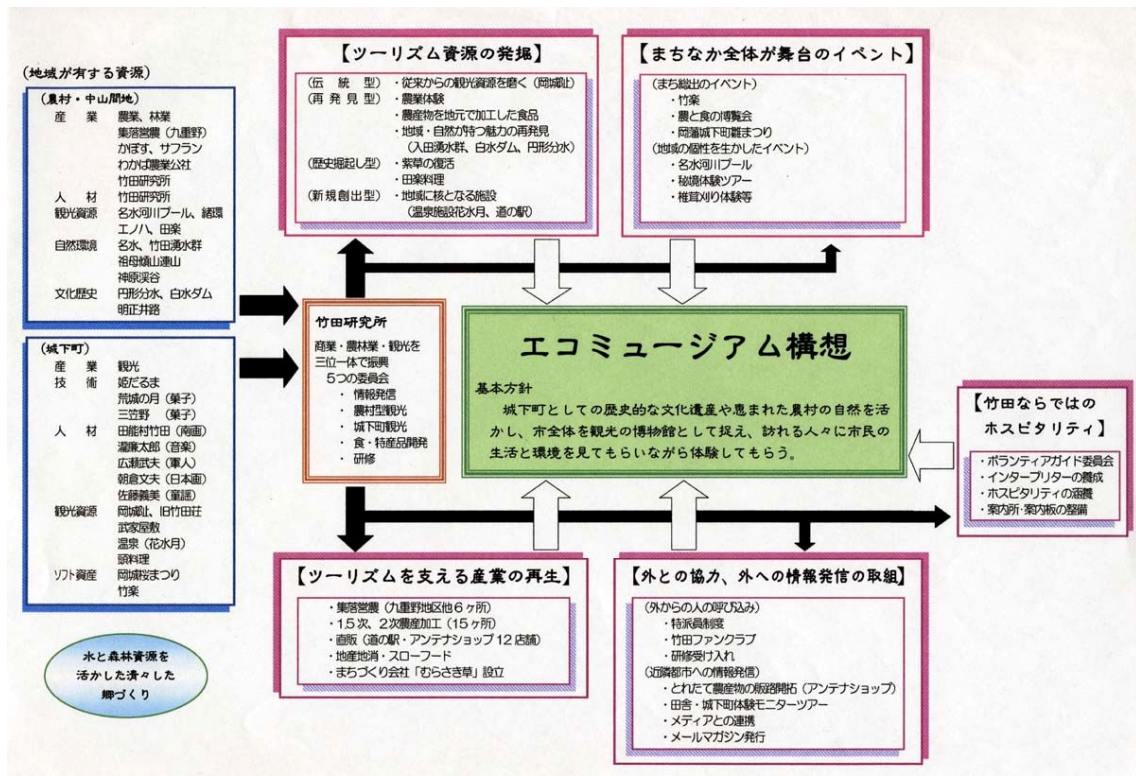
- ・ 竹田地区 (城下町ツーリズムの再生)
城下町、岡城址、温泉館、音楽の里

【農村地区】

- ・ 入田(にゅうた)地区 (名水文化と親水空間の創出)
里山林再生事業(日本一の名水の里森づくり)
- ・ 宮砥(みやど)地区 (緑豊かな農山村の産業振興の創造)
九重野地区谷ごと農場、加工所「みらい工房わかば」
- ・ 姫岳(うばだけ)地区 (祖母山麓と山里のくらしの再現)
農泊体験・あ祖母学舎(廃校利用施設)、しいたけ園・トレッキングコース
神の里交流センター「緒環(おだまき)」
- ・ 宮城(みやぎ)地区 (稲葉ダムと黄牛の滝の演出)
黄牛の滝、紫草園、出会いの湯
- ・ 城原(ぎばる)地区 (古代(万葉)文化の蘇生)
道の駅(農産物直売所)、万葉の里

③ 総合的な地域づくりを最終目標とした人材育成等

観光振興の取り組みは、観光客招致を目的としたものだけでなく、特産品開発や総合的な地域づくりを最終目標として再編されはじめている。観光ボランティアガイドの養成、ミニガイドができる店員の各店舗での養成等、人材育成等にも取り組まれてきている。



竹田研究所とエコミュージアム構想との関係 (資料:竹田研究所ホームページ)

(2) まち全体を舞台にしたイベントの展開

① 「竹楽」

竹田市は 2000 年から「竹楽」(ちくらく)という名の夜のイベントを行っている。このイベントの経緯、趣旨に関しては「たけた竹灯籠「竹楽」公式サイト」(竹田市観光協会等が運営)にわかりやすく説明されているので、以下同サイトから引用しつつ述べると、竹田市には竹が豊富に自生しているが(日本古来のマタケ、ハチクや 350 年前に中国から入った孟宗竹(モウソウチク)等)、その竹は近年あまり使われなくなってしまった。昔は建築材料、調度品、日用雑貨等の材料や食用として用いられていたが、近代化の過程でライフスタイルが大きく変化したこと等から、それらの需要が激減してしまったためである。それに伴い、竹林の荒廃が「加速度的に」進んできたということであるが、その見向きもされなくなった竹を使って観光振興を図れば、竹林の荒廃阻止にも経済浮揚にも役立つのではないかと竹田市が思いついて始めたのがこの「竹楽」である。

竹田市は 2000(平成 12)年から都市部の市民を中心にボランティアを募り、孟宗竹を伐採して里山の保全を図るとともに、伐採した竹を灯籠にして観光イベントに活用することとした。この活動は、里山の見直し、賑わい創出、産品開発等をあわせて進め、地域循環型経済システムの再構築にまでつなげようという遠大な構想の下に開始されたものであり、竹田市観光協会は「里山保全百年計画」をテーマに「里山コンサート」、「里山ワークキャンプ」(竹の伐採、竹炭づくりなどの体験)、「里山シンポジウム」、「竹工芸教室」なども行っている。これら一連の活動をまとめる大きな構想のいわばシンボルとして位置づけられているのが「竹楽」(ちくらく)である。

2000年は里山で伐採した竹で作成した灯籠3,000本を実験的に武家屋敷通りに設置したところ、大好評であった。そこで、2001年は12,000本に増やし、2002年はさらに20,000本に増やして「歴史の道」を中心に総延長2.5kmの街路に竹灯籠を飾り付けた。以後、毎年開催されてきており(最近では11月)、あわせて様々なコンサートや展示会(ギャラリー)等が開催されている。これまでの開催日は次のようであった。

第1回	2000(平成12)年11月18日～19日	3,000本
第2回	2001(平成13)年11月17日～18日	12,000本
第3回	2002(平成14)年11月15日～16日	20,000本
第4回	2003(平成15)年11月14日～16日	20,000本
第5回	2004(平成16)年11月19日～21日	20,000本
第6回	2005(平成17)年11月18日～20日	20,000本

「竹楽」は、開催前後の大勢のボランティアの活動、開催中の商店街等の協力(雨対策、観光客対応等)など、竹田市内外の大勢の人々が協力し、交流しつつ行われるイベントとなっている。「竹楽」に向けて、また、「竹楽」の後、竹がどのように扱われているか、公式サイトにわかりやすい記述があるので以下に引用しておきたい。

【伐竹作業】 決して足場が良いとは言えない環境で、竹を切り出す。

(竹が山の水分を取りすぎて木々が枯れてしまったり景観を損ねるのを防ぐ)

【竹の切り出し作業】 竹の長さを揃え、枝を払う。

【竹の搬出】 多くの市民ボランティアの協力で搬出する。

【竹の搬入】 一旦倉庫に入れて燻煙や加工の時を待つ。

(竹のライフサイクルは、青竹の場合1年、燻煙したものは3年)

－ 「竹楽」 －

【竹の再利用】 竹炭、肥料(チップに砕く)として再利用(市民ボランティアが活動)

この「竹楽」の取り組みは市内外から大きく評価され、2005年度には国土交通省の「地域づくり表彰」の「国土交通大臣賞」が竹田市観光協会に贈られている。その趣旨は同省のホームページには次のように記載されている。

これまで岡城中心に考えられてきた観光客誘致を城下町や農村部の観光資源の発掘と開発を行うことで、城下町や農村部へ誘導して「歩いて」「見て」「体験できる」竹田版ツーリズムへの転換を図っている。特に竹の灯籠を城下町に飾る「竹楽(ちくらく)」における取り組みに関しては、その成果が顕著である。里山の孟宗竹を伐採し里山の保全をはかるとともに、伐採した竹を灯籠として活用した観光イベント「竹楽」を行い、最終的には竹灯籠を竹炭にして販売、また河川浄化に活用する、竹を通した持続的な里山環境の保全と地域の産業連関を提唱している。竹楽は、期間中11万5千人の観光客を集める県下を代表するイベントとなり、観光による地域活性化に大きく寄与している。



「竹楽」武家屋敷通り (資料:竹田市パンフレット)



「竹楽」十六羅漢像前 (資料:竹田市観光協会ホームページ)

② その他のイベント

「竹楽」以外にも竹田市では例えば以下のような様々なイベントが行われてきている。

「農と食の博覧会」

城下町と農村を広く舞台として博覧会、講演会、各地区での農業体験、まちなかで
の田楽ツアー等大小さまざまな催しが行われ、竹田の美味しい農業・食文化がアピー
ルされた。

「岡藩城下町雛祭り」

それぞれの店が各自の家の様々な時代のお雛様を店先に展示したり、空き店舗で
子供たちによる手作りの竹雛を展示して、まちを歩きながら楽しめるイベントを開催し
た。

(3) まちづくり会社「むらさき草」の設立

竹田商工会議所は、中心商業地(古町商店街・中央商店街)の活性化策として、2000 年度に
「空き店舗対策事業」を開始した。その目的は、両商店街の活性化、空き店舗対策、集客力向上、
商店街と観光との結びつきの強化、景観づくり、各種イベントの開催であり、7 店舗でのチャレンジ
ショップの募集を行い(大分県内から公募)、その一環として「交流館」の建設(農業と商業の交流)、
休憩所の設置(来街者用)等も行った。チャレンジショップは、「むらさき草」(郷土料理店等2 店舗)、
美容院、洋菓子店、味噌・醤油量り売り店、「交流館」(海産物販売、無料休憩所)、「清和館」(案
内所、イベント会場)の7 店舗となった(市が商工会議所に補助金交付、一定期間家賃補助して格
安家賃で提供)。

「むらさき草」は、事業のシンボリックとして設立されたまちづくり会社「第三セクター(株)むらさき草」
(竹田市、商工会議所、商店街連合会による)が運営する施設である。「むらさき草」の名前は、万
葉の頃に高貴な色とされていた紫の染料である紫草が竹田で産したことに由来する(現在は絶滅
寸前)。会社設立の目的は以下のものであった(竹田市商工会議所資料から)。

- ・ 竹田市にこだわった物産の展示即売場を設置することにより観光客及び消費者ニーズに
応える。
- ・ 農産物と農産加工品等を販売する場所を提供することにより具体的な農業と商業の交流の
場とする。
- ・ 竹田市に訪れる観光客及び消費者の「よどみ」の場所を創設することにより、竹田市の話題
を作り、又情報の発信源とする。

「(株)むらさき草」は、2000 年 12 月に城下町地区の空き店舗を利用して 1 号店をオープンした。
明治時代初期に建築された木造 2 階建ての店舗を再生し、「むらさき草」と命名してオープンした。
1 階は郷土料理店、商店や農家の特産品紹介・販売コーナー、工芸等(押し花、藍染め、茶の湯)
体験コーナー、喫茶、和室(2 室)、2 階は紫草資料館、ギャラリー、和室(3 室)等となっている。「む
らさき草」は商店街の核施設となり、また、城下町ツーリズムの拠点ともなっている。

その後、同社は「温泉館」でも物産店を出した(竹田市では 1999 年 8 月に旧市役所跡に温泉が湧き出た)。また、「むらさき草」による染物加工、サフランソフトクリームの開発等、地域資源を活かす取組みも行っている。



「むらさき草」案内パンフレットより

(4) 「特派員制度」による外の協力者づくり

国土交通省の 2002(平成14)年度「地域づくりインターン事業」で竹田市に学生が派遣された。学生は 8 月 4 日～27 日の 24 日間派遣され、竹田研究所の準研究員としてツーリズムなどを研究し、提言を行った。インターン終了後の学生に対しては、その後も竹田市の親善大使的な役割をしてもらおうとともに情報交換をするため、竹田市が「竹田市特派員」に任命している。

(5) 街なみ環境整備事業

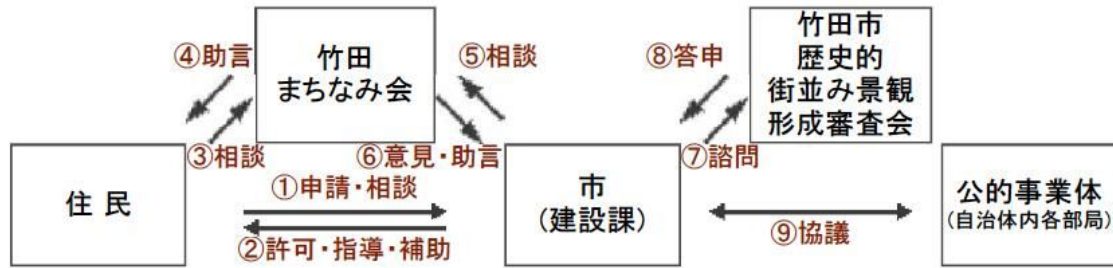
竹田市は、「歴史の道」の整備や明治・大正ロマン風まちづくり事業など、景観形成を図る様々な事業を展開してきているが、2002(平成 14)年度からは街なみ環境整備事業を活用して歴史的街なみにふさわしい水路整備や道路環境整備、公園整備、家屋の修復に対する補助等を行っている。

2002(平成 14)年度から 2 ヶ年にかけて名水の町「竹田」にふさわしい水路整備を実施した。2004(平成 16)年度からは歴史的街なみにふさわしい道路環境整備事業を実施している。また、街づくり協定に従って行われる修景施設の新築、増築、改築、改修等に対し、「街なみ環境整備助成事業」として補助を行っている(補助基準は市の「歴史的街なみ景観形成等補助金」ガイドラインによる)。

(注)街づくり協定:土地・建物の所有者・借地権者の 3 分の 2 以上の同意により締結され、竹田市長の承認を受けたもの

なお、補助を受けようとする住民は「竹田まちなみ会」に具体的な工事内容等を相談し、「竹田まちなみ会」は無料で助言する。

「街なみ環境整備助成事業」の推進・支援体制



(資料) 竹田市ホームページ

「竹田まちなみ会」は、街なみ環境整備事業が進められる中で設立された組織である。1998年度にメンバーが竹田市から委託を受けて街なみの現況調査を始め、翌年度に街なみのイメージ図を作成し、2002年6月に「竹田まちなみ会」を設立した。街なみ環境整備事業の修景補助については、施主からの事前相談、現地調査、基本設計、概算見積もり等を無料で行っている。2002年10月にNPO法人の認証を受けており、上記以外の幅広い活動を行っている。

5. 特徴的手法

まちと里とを結んでまちをトータルな視点で再生させようとしている点が大きな特徴となっている。その仕掛けとして「竹田式ツーリズム」や「竹楽」、「むらさき草」など様々な取り組みが展開されてきており、内外の人々の交流に大きな効果をもたらしている。また、まちの多くの人々が参加するというプロセスがまちづくりの大きな原動力になっている。また、このような取り組みの背景には、地域循環型経済システムの再構築という持続可能なまちづくりを目指す考えがある。

それを最もよく表しているのが「竹楽」である。これは、イベントを核としつつ、里山保全、観光振興、商業振興、資源有効活用、環境改善(竹炭の利用等)といった多面的な効果を得ている点が大変優れている。竹灯籠は春の雛まつりで竹雛用として再利用され、役目を終えると里山で竹炭にして販売する。青竹の竹灯籠はチップにして堆肥に、薫煙竹灯籠は竹炭にして川の浄化に活用するというバイオマスの研究も開始されている。「竹楽」を開催したことで、寂れかけていた城下町の歴史的文化的資源が再び息を吹き返すとともに、「努力すればこの町は活力を再生できる」という自信と誇りを取り戻す機会ともなったということである。

「竹楽」の運営組織である「竹楽実行百人委員会」は、里山保全と産業関連再構築を明確な目的とする「竹楽」に賛同した市民、ボランティア等広範囲の人々から構成され、2004(平成16)年には小中高生から高齢者まで延べ約3,000人のボランティアが竹伐採・加工、竹灯籠配置、灯点火、片づけと一連の作業に関係している。ここ数年で目立ちはじめたのは若年青年層ボランティアである。小中学生の自主的な竹灯籠磨き等のお手伝いや高校生の学園祭等での竹材使用によるオブジェづくり、大学生の企画と運営への参加等、能動的で積極的な参加意欲が感じられる。

「ツーリズム」、「竹楽」などにより、竹田市ではまちとむら、農と商、人と人との関係が少しずつ蘇っている。

6. 課題

① 年間を通した集客力の向上

観光客は2000(平成12)年度の76万人から2003(平成15)年度には110万人となり、竹楽とツーリズムの取り組みが新しい観光資源として一定の成果を上げている。しかし、未だ年間平均した集客力が弱く、地元経済への波及効果が小さい。

② 地域経営感覚の必要性

地域間競争の中で常に新たな価値観の創造と生活提案で競える地域になるために、情報収集と発信、他地域との差別化等戦略的な地域経営感覚を持つことが必要である。更に、必要経費を安定的に得られる持続可能な収入源の確保も必要である。

③ ツーリズム関連の人材育成

本格的な里山ツーリズム事業の取り組みにはガイド(インタープリター)の育成が必要である。

④ 新市における各地域との連携による魅力づくり

合併で発足した新しい竹田市では、各地域の連携による竹田市の魅力(歴史文化、自然等)、価値の創造を図る必要がある。

⑤ 産業、教育、福祉等を含めた総合的な政策の継続的な実践

里山保全と地域循環型社会の再生に向けて、農業、商業、観光といった個別の産業によるものから教育、福祉等を含めた統括的な政策の継続的な実践が求められる。

(参考・引用文献)

竹田市ホームページ

たけた竹灯籠「竹楽」ホームページ

中心市街地活性化基本計画概要書(平成14年9月)

構造改革特別区域計画「竹田市名水どぶろく特区」